

フランクリン文庫保存事業から

石井 健

ISHII Takeshi

フランクリン文庫の中には、出版当時の未製本資料 - 系で簡単にとじ、マーブル紙や装飾紙でくるんだだけの表紙をもつ仮綴じ本が多く含まれている。その多くは、仮綴じであるが故に既に相当の傷みを伴っており、綴じが弛む、背や表紙が破損・分離するといった症状が多く見られる。こういった資料を利用に供することは使い勝手の悪さばかりでなく、資料の一層の劣化を引き起こしかねない。そこで、今年の事業では特に症状のひどいものから優先的に簡易再製本化することとした。

ところが、その作業の中で書誌学的に面白い点が発見された。一つは、ある資料の折丁構成の問題であり、もう一つは正誤表（エラー表）を巡る問題である。（1）折丁構成の問題。F. Béchardの*De l'état de paupérisme en France et des moyens d'y remédier*（Franklin 135）には、Extrait du rapport de M. Villemainという見出しの付いた2葉1折がある。この作品がアカデミー・フランセーズから賞を受けた（標題紙にそのように書かれている）ことを受けて、受賞の理由等を説明したのがこの「抜粋」である。ところが、背が壊れ、綴じ糸が切れて、折丁がバラバラになっていたため、これが置かれるべき位置が問題となった。というのも、この折丁には折丁記号が印刷されていないからである。こうした場合、この手の折丁は全体の一番前か後ろに置かれているのが普通である。しかし、Franklin135の場合、おそらく資料がバラバラになる前の時点で付着したと思われる水垢汚れの跡から、「抜粋」は折丁記号bで始まる折丁（テーブル部分）とAで始まる折丁（本文の最初の折丁）の間に置かれていたと考えられる。これが出版当時のオリジナルな構成であったとすると、書誌学的には少々不思議な書物であるといえよう。

（2）正誤表の問題。*Compte rendu au roi*（Franklin 307）は革命前夜のフランスの財政を報告したもののだが、この中に*Fautes à corriger dans la première édition de cette Collection de Comptes rendus*という見出しで始まる正誤表1葉が挟まれていた。しかし、その見出しからもわかるように、これは*Compte rendu au roi*の正誤表ではなく、Mathon de La Courの*Collection de comptes-rendus...* 初版（1788）への正誤表である。この*Collection...*初版は、センターの場合、メンガー文庫に含まれており（Fr.1110（3））、また同じ年の内に第2版が出版されているが、こちらは一般貴重書の1冊として所蔵されている（貴A-630）。しかし、肝心のフランクリン文庫の中には該当する資料が存在せず、つまり正誤表だけが宙に浮いた形なのである。しかも興味深いことに、メンガー文庫所蔵の初版には、この正誤表が挟まれておらず、ゴールドスミス・クレス文庫マイクロフィルムコレクションに含まれている同じ初版にも正誤表の存在は影も形もない。管見する限りでは、正誤表について触れているカタログは『エイナウディ』のみである。それによれば、正誤表は折られて挟まっていたとのこと。どのような形でこの正誤表が配布されたのかは今のところ皆目見当もつかないが、とにかくどうやらこの正誤表自体がかなり貴重なものなのかもしれない。

（一橋大学社会科学古典資料センター助手）

「中性紙」とスリップの交換

石井 健

ISHII Takeshi

1980年代以来日本では、酸性紙問題をきっかけに書籍の保存に対する関心が高まり、それに伴って「中性紙」と銘打たれた洋紙が様々な企業から製造されるようになった。古典資料センターでも、開所以来所蔵資料の保存に対して深い関心を寄せてきたが、資料の請求番号の記入や図書IDを示すバーコードの貼付を直接資料に対して行わず、「中性紙」スリップを介して行う方法が採用されたのも、その現れの一つであった。

ところが、一昨年七月のことである、このスリップに使われた「中性紙」が実は中性紙ではないのではないかという疑いが生じた。メーカーに問い合わせをしたものの、疑念は解消せず、結局東京芸大の稲葉助教授や東京農工大の岡山助教授といった紙の専門研究者や民間の研究所に調査を依頼することとなった。しかしその結果は当初の目的を超えて驚くべきものとなった。まだ正式な報告書を受け取っていないことと、これから本格的な実験・追試を行うということなのでここでは詳しく説明しないが、とにかく問題の洋紙が何らかの酸性物質を含んだものであること、そして、こうした紙を書物に挟んで使用していると紙の酸性化が通常よりも促進されるおそれがあるだけでなく書物に対しても悪影響を与えかねないことがわかった。

そこで、センターではスリップの台紙を問題の「中性紙」からアルカリ物質を含有した保存用洋紙に切り替え、現在に至っている。世界的に貴重な西洋社会科学古典資料を預かる以上、その保存・管理には最大限の努力を払う義務を負う我々としては、今後も国内外での保存科学研究の動向に留意しつつ、それとともにセンター内でも独自に保存科学研究を推進する必要があるだろう。